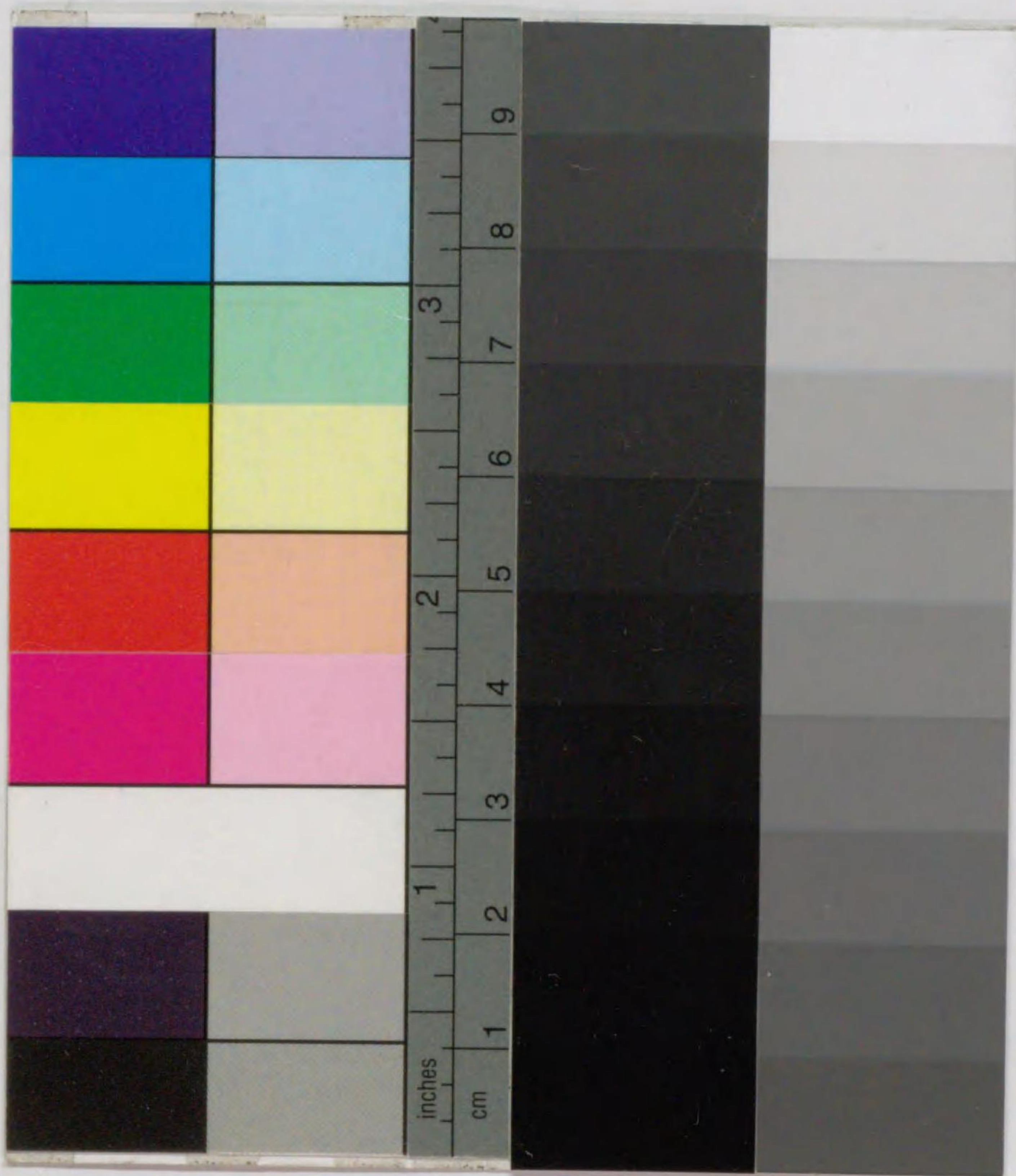


勝將  
敗棋

此  
の  
一  
手

186

211





准名人 關根金次郎著

將棋  
勝敗

此の一手

東京

大阪屋號發行  
斯文館

大正  
6. 8. 29  
内交

31.10.10





准人名關根金次郎



は し が き

將棋一局の中には始、中、終の三要處あり宛かも音樂の序、破、急あるに同じ始は駒組の定跡なり中は戦端の仕懸なり終は寄せ也、此中定跡の書は古今先哲の書多く今更ら其可否を研究せんとすれば天野宗歩の再來を期するにあらざれば容易に手を下しがたかるべし、而して寄せの終盤に至りては素より其局面の形勢に基くを以て豫め局面を假設して一々之を説くことは極めて困難なり之れは只古今數百の詰將棋を見て自得するの外なかるべし

獨り中盤の戦端に至りては庶幾はくば研究の餘地あるべし之れ其戦端の利害得失は多く着手の遲速前後と方面の緩急要否に基くも



のにして畢竟は『一手』の可否に依れるを以て也予多年萬朝報及び  
將棋新報に於ける棋譜の批評に從事し實地に就きて其可否を考究  
し一々其利害を説き平手より二枚落ちに至るまで略其要訣を盡し  
たり、今回即ち其主なるものを選択して一書とし名け『將棋勝敗此  
一手』と云ふ將棋は變化無窮なりと雖も戰端の一手は實に勝敗を  
決するの原因也戰端に利あつて終局に敗戦するは其人の罪なり法  
の罪にあらざる也讀者宜しく此書につきて研究し其棋法のある處  
を察せば此書の説く處獨り一方面に留まると雖も能く勝敗の理の  
一手にあるを知り其緩急要否を悟るに庶幾かるべし

大正六年八月

關根金次郎識

目次

平手相懸	四四歩の利害……………一	平手	端歩の利害……………三五
同横歩取り	四五角打の利害……………四	同	二八飛引と五八金の關係……………三七
同美濃崩し	六五桂飛の時期……………七	同	先手角替り……………三九
同向ひ四間飛車	八五桂飛の連速……………八	同	先手六六歩留……………四〇
同相櫓	端歩突きの利害……………一一	同	筋違へ角……………四二
同	六六銀の利害……………一六	同	七七銀と五七銀の關係……………四六
同居飛車四間	五五歩突の利害……………一九	同	櫓圍に端歩の損……………四七
同	二二飛の連速……………二三	同	角替りに對する美濃圍の利害……………四九
同櫓崩し	櫓組の形勢……………二四	同	先手が後手、後手が先手……………五〇
同角替	四五角打の利害……………二七	同	美濃圍に對する七四歩……………五一
同棒銀	二六銀の利害……………三〇	同	飛筋を開けて角道を止める不利……………五二
同居飛車四間	五五歩突越……………三三	同	五五歩留めの仕懸け駒組を察すべし……………五三
同飛車左廻	一四歩受けの利害……………三三	同	五筋の位負け……………五五
			七七銀の不利……………五六











四金 兎六六桂打

之れに後手方始めに敵陣を荒したるやうなるも駒足らざるため漸次に防がれ却て悪くなるのであります又先手の八四歩に對し左の如く指しても面白くありません因て始めの四五角打は面白くありませんので指さぬ事であります

後八四歩 兎八二歩 兎八六角打 兎六四歩 兎同角 兎五八銀なる 兎同金

後五四金打 兎五五角 兎同金 兎七五桂打 兎六三歩 兎六四銀打

此六四の銀を取れば六三銀と打たれ後手の敗であります

又一例を示しませば圖面の四五角打以下

後四五角打 兎二四飛 兎三八歩打 兎同銀 兎二三歩 兎八七歩 兎七六飛

兎七七歩 兎六六飛 兎六八玉 兎二四歩 兎六六歩 兎二八飛 兎七六歩 兎

二七角なる 兎一六角 兎同 兎同歩 兎二七角打 兎三九飛打 兎五四角

なる 兎二七歩打 兎同 兎七七玉 兎五四 兎二七歩 兎同 兎同銀 兎

後手方居角で三一へ引かぬのは此三三桂なるを同角と取るためであります又六四へ打つた桂は五六の銀を取る目的でなく七六へ飛ぶ含みがよろしいのであります

平手角替 四五角打の利害

兎七六歩 兎三四歩 兎二二角なる 兎同銀 兎四五角打 兎五二金右 兎三

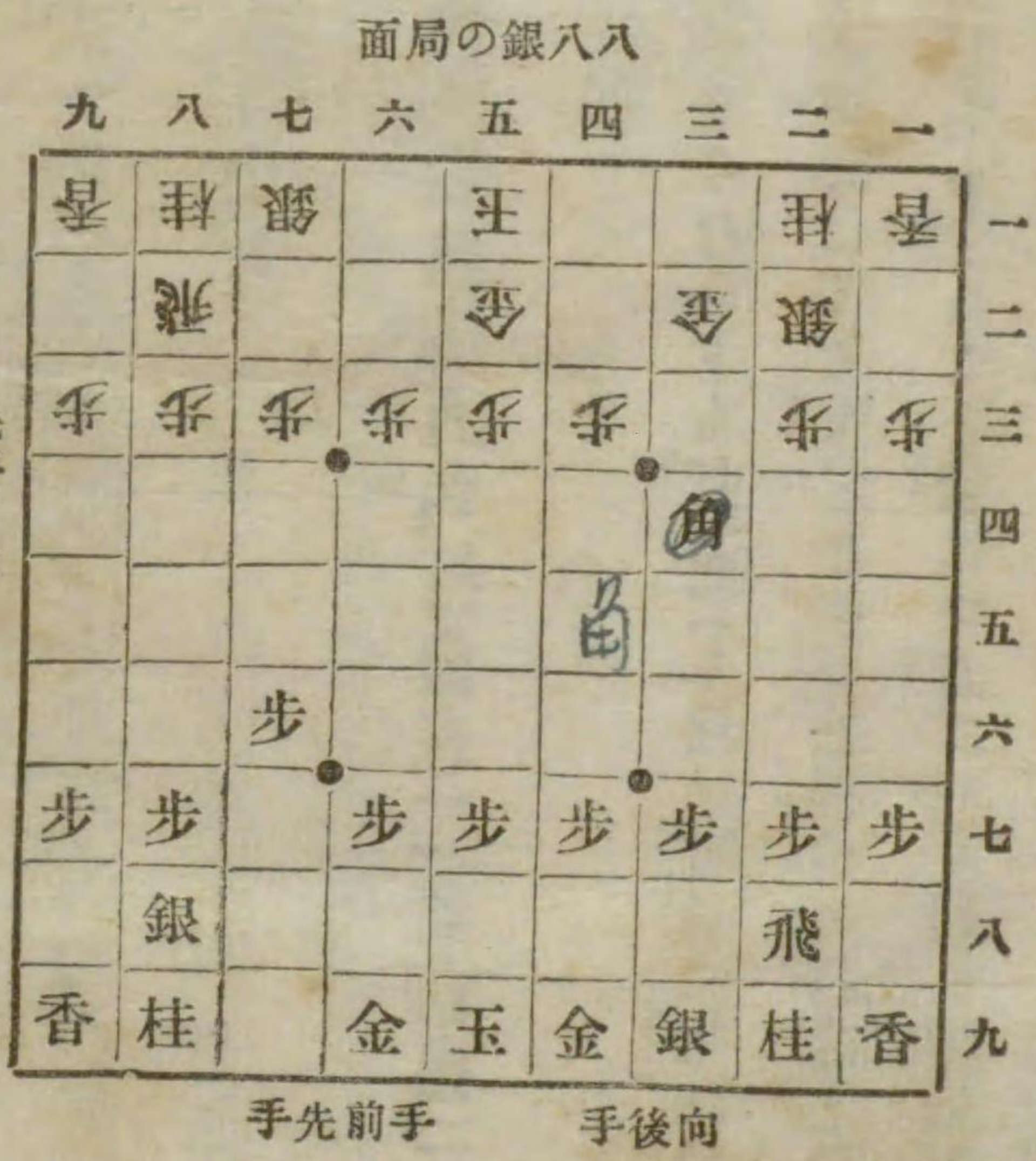
四角 兎三二金 兎八八銀

此先手の四五角打は歩一つ手に持ち利益のやうなれども打ちたる角は容易に化れず之が反對に敵方には手に角を持ちたるため何時にても宜しき場處を伺つて打ち込むの利がありました先手方は之を恐れて駒を盛り上ること能はず大に指し悪く結局損の手となるものであります故に高段の棋士は好んで此四五角を打ちませまん最も實戰の棋譜中に時々此角を打ちたるものあるを見ますが之は多少敵を軽く見たる時か強よ手が先手を指したる際に力にてつぶさんとの臨機の指し方でありまして五分五



分の手合にては此角を打ちたる方が損であります、總じて大駒は之を打つに時機あり餘り大事過ぎて機を失するも好からざれど成るべく輕卒に打たず手に持つて敵を脅迫する時は却つて敵が指し悪く手に持ちたる方が利益の事があつて能く味ふべき處であります、而して此四五角を打つた結果如何と申しますと左の如く指されて打ちたる方が面白ありません

四。五。角。後。二。三。金。後。八。八。銀。後。六。二。銀。後。六。六。步。後。五。四。步。後。二。六。步。後。五。三。銀。後。二。五。步。後。三。三。銀。後。七。八。角。後。四。四。步。後。一。六。步。後。五。五。步。



一。五。步。後。五。四。銀。後。一。四。步。後。同。步。後。二。四。步。後。同。銀。後。一。二。步。後。同。香。後。二。四。飛。後。同。步。後。一。二。角。なる。後。三。三。桂。之にて先手方は攻め方は見ゆるも切れ形の恐れがあります又他の指し方で

四。五。角。後。二。二。金。後。八。八。銀。後。三。三。銀。後。五。六。角。後。四。一。玉。後。七。八。金。後。五。四。步。後。六。六。步。後。六。二。銀。後。七。七。銀。後。五。五。步。後。六。七。角。後。五。三。銀。後。五。八。金。後。六。四。步。後。二。六。步。後。八。四。步。後。六。九。玉。後。四。四。步。後。二。五。步。後。三。一。玉。後。四。八。銀。後。四。三。金。右。後。一。六。步。後。五。四。銀。後。七。九。玉。後。六。二。飛。後。三。六。步。後。六。五。步。後。同。步。後。同。銀。後。六。六。步。後。同。銀。後。同。銀。後。同。飛。後。七。七。銀。打。後。六。二。飛。後。六。六。步。後。三。四。步。後。四。六。步。後。五。四。銀。打。後。四。七。銀。後。六。五。步。後。同。步。後。同。銀。後。六。六。步。後。同。銀。後。同。銀。後。同。飛。

右の外にも指し方がありますが何れにしても四五角は敵に防がれて不結果となりま



平手棒銀 一六銀の利害

兎七六歩 兎三四歩 兎二六歩 兎四  
 四歩 兎二五歩 兎三三角 兎四八銀  
 兎三二銀 兎三六歩 兎四三銀 兎三  
 七銀 兎五四歩 兎二六銀

此二六銀を棒銀と申しまして素人の能く指す手でありすが高段の棋師は之を馬鹿銀と云つて多く指さぬことであ

ります之は其受け方を知らぬ中は素人の苦む手でありすが受け方さへ本筋に行けば此棒銀は馬鹿になりすので即ち馬鹿銀と云はれるのであります其受け方は左の通りでよろしいのであります即ち二六

面局の銀六二

九	八	七	六	五	四	三	二	一
星	桂	銀	金	王	金	桂	星	一
	飛				馬	歩		二
歩	歩	歩		歩	歩			三
						歩		四
		歩				銀		五
歩	歩		歩	歩	歩		歩	六
	角					飛		七
香	桂	銀	金	玉	金	桂	香	八
								九

持駒 先手 後手 双方なし

手先前手 手後向

平手飛車左廻 一四歩受けの利害

普通の將棋にては大抵端の歩を突くものであります此將棋には双方とも端の歩を突かぬのが例であります若し何れか端の歩を突きたる時に相手方が受けて同じやうに端の歩を突て居てくれればよきも之を受けずに直ちに仕懸けて來らるゝ時は端歩を突ひた方が手遅れとなつて受け太刀となりますから互に端歩を突く暇のなき將棋であります、因みに五筋の歩は後手も受けて指すが大抵の將棋の法であります

兎七六歩 兎三四歩 兎二六歩 兎八四歩 兎二五歩 兎八五歩 兎七八金 兎  
 三二金 兎二四歩 兎同歩 兎同飛 兎八六歩 兎同歩 兎同飛 兎二六飛 兎二  
 三步 兎八七歩 兎八四飛 兎七五歩 兎六二銀 兎二二角 兎同銀 兎七七桂  
 兎三三銀 兎五八玉 兎四一玉 兎一六歩 兎五二金 兎三八銀 兎五四歩 兎



八六歩 〇 五三銀 〇 八五歩 〇 八二飛 〇 八六飛 〇 八三歩 〇 九六歩 〇 九四歩

此九六歩に對する九四歩の受けは不可でありまして左の結果を來します

九六歩 〇 九四歩 〇 九五歩 〇 同歩 〇 九二歩 〇 同香 〇 九一角 〇 六

二飛 〇 八四歩

又九二歩に對し同香と取らず

同飛 〇 八四歩 〇 同歩 〇 同飛 〇 八二歩 〇 九三歩

と指されても悪しくなります因て始めの九六歩に對し後手方九四歩と受けずに左の通り指すのが法であります

九四歩の局面

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	将				王		将	皇
	飛			馬		馬		
	歩	歩	歩	歩	歩	歩		
	歩							歩
		桂	歩	歩	歩	歩		
		金		玉		銀		
香		銀			金		桂	香

持駒 先手 角、歩 後手 角、歩

手先前手 手後向

九に居て二段が通つて居る時は飛車を二八へ引き(即ち二段)場合によりては此飛を五八へ廻る含みがありますが既に五八金と云ふ如く飛が五筋へ廻る目的の無き時は二六へ引ひて居るのが徳であります

平手 先手角替り

七六歩 〇 三四歩 〇 二六歩 〇 八四歩 〇 七八金 〇 三二金 〇 二五歩 〇 八五歩 〇 二二角 〇 なる 〇 同銀 〇 八八銀 〇 三三銀 〇 七七銀

此先手から二二角なると角を替つて行く手は素人方の能く指す手でありすが之れも同じく先手が後手となり一手損であります即ち本文の如く同じやうに角を手に持ちても三三銀七七銀と云ふ順となるので先手方は既に後手となつて居ります平手將棋は一手の先後では始めの中は左まで損徳が分らぬやうでもいよく戦端となりますと後手になつた方は受け方となりますと大に損であります



平 平 先手六六歩留

〇七六歩後三四歩〇六六歩後六二銀〇七八銀〇五四歩〇五六歩後  
 六四歩〇六七銀〇七四歩〇四八銀〇五三銀〇五七銀〇三二銀〇四  
 六歩〇四四歩〇三六歩〇四三銀〇九六歩〇九四歩〇一六歩〇一四  
 歩〇七八飛〇七二飛〇四八玉〇四二玉〇三八玉〇三二玉〇五八金  
 左〇後五二金右〇四七金〇八四歩〇三七桂〇八五歩〇二八玉〇八二  
 飛〇七七角〇四二金上〇三八金〇六三金〇二六歩〇七三桂〇四八  
 銀〇後六五歩〇同歩〇同桂〇六八角〇六四歩〇同銀〇四五歩〇六七  
 歩

先手方にて六六歩と止めることは先手の効を失ひ弱き指し方でありませぬ之れは古法  
 では多く用ひてありますが現今は好みませんで先手の時は強く〇七六歩〇三四歩〇

二六歩と指します若し後手より八八角なると角を替つて来れば先手は同銀と取つて  
 畢竟二手多く指した形となります即ち二六歩と八八銀だけ二手徳となつて居ります  
 同じ力の將棋で二手徳をして居れば之れは云ふまでもなく利益であります但し後手  
 方は受け方でありまして二筋より攻めて来られますので飛、角兩筋より指されては  
 危険でありますから四四歩と角道を留め敵が二五歩と突ひて来れば三三角と上つて  
 二筋の歩を換らせぬのが普通であります前にも申し通り先手で六六歩と角筋を止  
 めるのは古法であつても弱き指し方でありませぬ  
 又先手方一旦五七へ上つた銀を再び四八へ引く手も古法には多く用ひてありますが  
 之も手損の指し方でありませぬ此邊は古より今の指し方が進歩した處であります次に  
 六七歩は五五歩と指す處でありませぬ

尚ほ現今も時には此六六歩留めを指す棋客がおりますが其結果は先手が後手となり  
 後手方に飛車筋の歩を切られ且つ手に一步を持たれ大なる損となります其一例左の



如し

〇七六歩〇三四歩〇六六歩〇八四歩〇二六歩〇八五歩〇七七角〇  
 六二銀〇二五歩〇三三角〇七八金〇五四歩〇五八金〇三二金〇六  
 七金右〇二二銀〇四八銀〇四二角〇五六歩〇五二金〇八八銀〇三  
 三銀〇六九玉〇四一玉〇六八角〇八六歩〇同歩〇同角〇五七角〇  
 四二角〇八七歩

此の如くにて同じ組み方となつても後手方は却つて先手となり且つ前に申せし通り  
 飛車筋の歩を切つて之を手に持つため大に徳であります

平 手 筋違へ角

七六歩、三四歩の次に二二角、同銀と角を換へて直ちに先手から四五角と打つのを  
 筋違へ角と申しまして素人方の好んで指す將棋でありますが之は高段の棋士には餘

り無い指しかたであります最も時々は之を指す人もありますが多敵を軽く見た時  
 か又は普通の定跡では合ひの悪しき敵などに對して力將棋を試みんとするためであり  
 ますが左に其一例を出します

〇七六歩〇三四歩〇七五歩〇八八角なる〇同銀〇二二銀〇七八飛  
 〇四五角打〇七六角〇四二玉〇三八金〇三三銀〇四八銀〇六二銀  
 〇四九玉〇六四歩〇三九玉〇八四歩〇二八玉〇八五歩〇四六歩〇  
 七二角〇七七銀〇六三銀〇六六歩〇七四歩〇同歩〇同銀〇五八角  
 〇七五歩〇四七角〇六三角〇一六歩〇五二金右〇一五歩〇二四歩  
 〇三六歩〇五四角〇八八銀〇七六歩〇六八金〇七五銀〇六七金〇  
 八六歩〇同歩〇同飛〇八七歩〇八四飛〇五六歩〇四四歩〇五五歩  
 〇四三角〇七二歩〇八六歩〇同歩〇同銀〇八五歩〇同飛〇七六金  
 〇八七銀ならず〇八五金〇七八銀ならず



以上にて幾分よろしき形なるも四五角の筋角を打ち一氣に崩さんとしても斯の如く手敷を要して必ずしも勝ち得るとは云ひがたく誠に骨の折れる力將棋となりますから此筋違角は好まぬ將棋であります

右の通此筋違角は容易に化しませんで大に力戦を要しますので好んで指す法ではありません但し此一例は先手が石田に組まんと考へて七五歩と突ひて來た機を見て後手から八八角、同銀と取らせ二二銀、七八飛と廻らせ其處で後手が六五角と打ちたるものでありまして先手の七五歩が突ひてあるので八八銀の駒立が悪しく後手の二二銀は堅固でありますから八八角と替つたのは一手損でも悪しくはありませんが(別章の七六歩、三四歩、二二角なる、同銀と指して先手の手損となるのは異つて居ります)六五角の筋違角は餘り効能がありません説明であります、況して七六歩三四歩の次に直ちに二二角なる、同銀、四五角と打つのは好ましからぬ手でありま

尙筋違角の不利なる一例を左に示すが斯の如く先手から角を替り直ぐ四五へ打ちしは早く我が唯一の武器を一方へ据へつけしと同じ甚だ融通の利かざる手となるべし此の如き大事の武器は何時にても都合よき時に用ひらるるもので縦令仕舞まで角を手に持つて居ても矢張り手にある角が敵を脅迫するの武器となつて居るものであります古人の棋譜に此角を終局まで手に持つて居て負けたものもありませんが之は負け將棋に出來て此角を利用する機會を得なかつたもので實に已むを得ざるもので決して笑ふべきではありません然るに早くも此角を打つて仕舞つて敵に甘く防がれて只三四の一步を取つた丈で其角が化れず次第に壓迫されて一八角と引く手順に落ち入つては十分の位負けで最早勝算が覺束ないのであります

- 七六歩 八四歩 二六歩 八五歩 七七角 三四歩 八八銀 三二金 二五歩
- 七七角 同銀 二二銀 四五角 五二金 三四角 三三銀 五六角 七二
- 銀 四八銀 六四歩 三六歩 六三銀 三五歩 五四銀 三四歩 二二銀 三七銀



八飛 龜六五銀 龜四五角 龜四四步 龜一八角 龜四三金 左 龜二四步 龜同步 龜同飛 龜二三步 龜二

此の如く四五角(筋違角)と打つて三四の歩を掠めても一八へすくめられて同じ力では敗兆歴然であります

平手 七七銀と五七銀の関係

龜七六步 龜三四步 龜二六步 龜四四步 龜二五步 龜三三角 龜四六步 龜三二銀 龜四八銀 龜五四步 龜五六步 龜六二銀 龜七八金 龜五三銀 龜五八金 龜五二金 右 龜六九玉 龜四二玉 龜五七銀 龜四三金 龜六八銀 上 龜三一玉 龜七七銀 龜六四銀 龜六六步 龜八四步 龜六七金 右 龜八五步 龜七九角 龜七四步 龜六八角 龜五一角 龜七九玉 龜二二玉 龜八八玉 龜九四步 龜一六步 龜一四步 龜三六步 龜七五步 龜同步

度大砲の先きへ我軍隊を並べた如きもので此時に敵から三四歩と角道を明けられても先手方の手損を來す結果となりますが、然らずとも一時我角を封じた事となりますので此七七銀は七七角と上つて居るのが法であります最も七七銀と上れば先手の角も七九へ引くべきこととなり損の無き指し手ともなります、それにて七七銀と上つた上は後手方より早くも先手は櫓圍ひに組む下心なりと看破され即ち敵に先づ我策戦を悟られるので大に損があります然るに七七角ならば此角は六八へも引け大に手廣ひのであります

平手 屏風銀

龜七六步 龜三四步 龜二六步 龜三二金 龜七八金 龜五四步 龜五六步 龜六二銀 龜四八銀 龜五三銀 龜二五步 龜四一玉 龜六九玉 龜六四銀 龜二四步 龜同步 龜同飛 龜五二飛 龜二八飛 龜二三步 龜二二角 なる 龜同銀



八八銀

此將棋にては先手方は相懸りに指さんとし後手方は六四へ銀を出て力將棋を試みんとしたるものなれば先手方は八八銀と上つたなれど此の如く銀を玉の横に上り一方へ垣を築く如くなるを俗に風屏銀と云ひ好まざる手也(又垣根銀とも云ふ)此場合は此銀を六八へ上るを至當とす天野宗歩氏は多く六八へ上つて勝ちを得たのであります、即ち前の指し口に對し後手方は直ちに中央より攻勢を取りたれば先手方は之を防ぐために左の如く指し結局此銀を七七より六八へ引く手順となり二手の損を爲したるのは始めに八八へ銀を上つたのが面白からざりしためであります

後七四歩 後三六歩 後五五歩 後同歩 後同銀 後七七銀 後三三銀 後七九

玉後五六歩 後六八銀

之より後は双方の力にも依りますが後手方より此の如く指し込まれたのは一に先手方が八八銀と上つたのが悪かりしたため手損をして後手に指し込まれたのであります

左香落 六二銀早越し

ばかりは古人と雖も必ずしも下手よしと云ふ定跡を極め盡すことが出来なかつた程でありますから私などに其窮極まで下手よしと云ふ手を見出すことの出来る筈はありませんが、只多年實驗した處で双方の地位に立ちまして一方が此時斯したらば利益であるとか不利であるとか云ふ點につきて申し述べやうとするのであります、最も此左香落ちは其要義は第一に七筋、第二に九筋、それより六筋、八筋の戦端に依つて勝敗の数の定ると云ふ程でありますから此戦端の利害を説けば其後は双方の手腕に依るものでありますから到底戦端以後の手は説きつくすことが出来ませんものゆゑ、此に説き出します戦端の一手二手が即ち此將棋の生命であります、其つもりで各章を御覽あらば得る處があること、考へます

後七六歩 後三四歩 後六六歩 後六二銀 後七五歩 後八四歩 後七八飛 後



八五歩 兎七六飛 兎九四歩 兎七八銀 兎六四歩 兎七七角 兎九五歩 兎四八玉 兎六三銀 兎三八銀 兎八四飛 兎四八金 兎四二玉

此將棋は元祿三年十一月お城に於て上手方伊藤宗印、下手方大橋宗與兩氏の左香落將棋なるが下手方の六二銀と早く上りたるは古風にて現今は指さぬ手であります此處は現今にては八四歩、七五歩、八五歩、七七角と指します一寸見ますと同じやうに見えますが六二銀を先きを上りたるため上手に七六飛と浮かれる手順になります然る時は折角香落ちの傷みに乗じて端より崩すに困難となりまして勢ひ力指の形となりません、既に敵に香を落させたるからは或るべく其傷みに乗ずるのが下手方の利益でありますから彼の三筋飛車同様に力指しは損であります（香落ちに三筋を指すの損は別局で申述べます）

左香落 四七金は古流

同じ元祿四年のお城將棋宗桂、宗印兩氏の左香落に左如く指てあります六二銀は前に申した通り現今指ぬ手でありますが尙は上手方の四七金も現今は指ぬ手でありまして或る必要の場合までは五八金のまゝであります其利害は一言に盡せませんが兎も角此六二銀と四七金は古風で現今は指さぬと云ふ事だけを注意いたして置くのであります

兎七六歩 兎三四歩 兎六六歩 兎六二銀 兎七八銀 兎六四歩 兎七七角 兎六三銀 兎六八飛 兎四二玉 兎四八玉 兎三二玉 兎三八玉 兎五二金 兎右 兎四八銀 兎一四歩 兎一六歩 兎七四歩 兎三六歩 兎五三銀 兎四六歩 兎五五歩 兎同歩 兎同角 兎四七金 兎五四銀 兎二八玉 兎二二角 兎三八金 兎五五歩 兎三七桂 兎四四歩 兎五八飛 兎六五歩

之までが分れの始めであります





左香落

六筋早仕懸の無理

○七六歩○三四歩○六六歩○八四歩○七五歩○八五歩○七七角○後  
六二銀○七八飛○四二玉○六八飛○三二玉○六七銀○五二金○右○  
六八角○後○六四歩○七六飛○後○六五歩○同歩○後○八八角○なる○  
五五○後○七七桂○後○四二銀○四八玉○後○三三銀○三八玉○後○九四歩○  
八玉○後○一四歩○一六歩○後○九五歩○三八銀○後○八四飛○六七銀○  
後○五四歩○後○六三銀○五八金○左○後○四四○後○四六角○(以下略) ます  
が此將棋は上手の勝ちとなりました)

此棋譜は私が某氏に對して左香を落して指したものであります。が前章に申せし如く古風に六二銀と上つて六筋より早仕懸けで端の香落ちの傷みを指ぬと云ふは不利益であります。即ち下手方は角は化ても歩損の上に上手に角を捌かれて面白くありません。

○因て此六二銀の手で○九四歩○七八飛○九五歩○六八銀○六二銀○六七銀○六四歩と指したならば上手に六八角と引く手がありません。従つて七六飛と浮かれまんから端より崩す手順が出来ますのであります。



左香落

六六歩の意味

左香落は上手で十中の八九は六六歩と角道を留めます。即ち

○七六歩○後○二四歩○六六歩

と云ふ順であります。上手が此六六歩と自から角道を留めますのは上手には左の香がありませんから下手から角を替はられますと直ちに陣中へ角を打ち込めますから之を防ぐに駒組みの困難を來します。又之を打たせずとする時は忽ち敵に指し込まれますから一時角替りを防ぐために六六歩と留めるのであります。上手が六六歩を留めざりし不利の一例

わははは







すが直ぐ八四飛と浮たのでは敵の飛車は始め通り七八に居りますから先づ九二へ飛を廻つて敵の飛車を九二へ一時隠居させて我は七筋の歩を替つて序に飛車を戦場へ乗り出させたので即ち一手の徳をしたのであります、次に下手方が七五歩と打つ意味を申し述べます

左香落 七五歩打の意味

前章に申し述べました如き形となります(圖面参照)と下手方は自から飛車の頭へ七五歩と打ちます(い印)素人方の考へでは此歩は我から飛道留めるので引け手のやうに思ひませうが此歩を打ちませんと上手から六五歩と突ひて飛、角の大替りを迫まられます之を交換せずとすれば種々なる悪結果となり又交換すれば下手には飛、角を打ち込まれて桂、香を取られる手順となり敵方へ飛、角を打ち込んだ處で桂一枚しか取れず其上に上手は美濃圍で堅固であり若し又取つた桂を利用して玉の端から

崩して懸らうとしても上手は香を取つて居るから此香を利用さるゝ時は端から崩れず却つて下手の端が崩れます故に下手は圖面の場合には一旦は七五歩と打つて飛、角の交替を避けるのが利益なのであります  
 實例を示します(某六段と四段の手合)

- 七六歩 ○三四歩 ○六六歩 ○八四歩 ○七八銀 ○八五歩 ○七七角 ○九四歩 ○七五歩 ○九五歩 ○六七銀 ○九二飛 ○九八飛 ○四二玉 ○四八玉 ○三二玉 ○三八玉 ○九四飛 ○一六歩 ○一四歩 ○二八玉 ○六二銀 ○三八銀 ○五二金 ○五八金 ○七四歩 ○同歩 ○同飛 ○七八飛 (此處で七五歩と打つが定跡) ○七三桂 ○六五歩 ○七七角 なる ○同飛 ○同飛 ○同桂 ○七六歩 ○同銀 ○七九飛 打 ○六八角 ○七八飛 なる ○三六飛 打 ○四五角 ○四六飛 ○四四歩 ○七四歩 ○四三金 ○七三歩 なる ○同銀 ○四五飛 ○同飛 ○五五角 ○六二銀 ○一一角 なる ○二二銀 ○銀 ○一二玉 ○九六歩 ○同歩 ○七五歩 ○六七銀 ○八七筋 ○一五歩 ○七六歩 ○七八歩 ○三一金 ○五六歩 ○七七歩 なる ○同角 ○七五桂 ○一四歩 ○六七桂



なる 〇同金 〇一一步 〇二二角 〇同金 〇四一銀 〇同玉 〇二二角 〇なる 〇三三銀 〇二一五  
 〇三二銀 〇五五桂 〇四二金 〇引 〇三一金 〇五五玉 〇三二金 〇六七銀 〇四二金 〇同銀 〇  
 七二銀 〇六一金 〇四三桂 迄にて 〇上手の勝  
 之は 〇上手が飛、角を八筋へ打つて桂香を取つた例とは異りますが兎も角下手が七五  
 歩を打たざりし結果が飛角を替はられて負けとなつたのでありまして此七五歩は古  
 人が研究した手でありますから是非打つべきであります

左香落 鳥指の利害

〇七六歩 〇後八四歩 〇六六歩 〇後八五歩 〇七七角 〇後六二銀 〇五六歩  
 之れは下手が角を三一に引ひて鳥指しと云ふ定跡で指す考へであります香落ち  
 は矢張り七六歩の次に三四歩と角道を明けて次第に九筋の歩を突き香落ちの傷みよ  
 り指すのがよろしいので此角道を明けずに指すのは大に不利益であります

左香落 上手中飛車

左香落で上手が中飛車に指すは五筋に位取つて端の香落ちの傷みを指させぬため  
 ありますから其手に乗つて端の傷みを指せぬことゝなりますと下手方は香を落して  
 もらつた効が無く二段の違ひでは大抵負けとなる道理でありますから注意を要する  
 ものであります即ち

〇五六歩 〇後三四歩 〇五八飛

と指し上手は中飛に廻りました此時下手には五四歩と受ける手と六二銀、五五歩、  
 六四歩と突ひて後に六三銀と上る含みと二種ありますが六二銀の方は結果下手によ  
 ろしくなく此五六歩、三四歩、五八飛の次に下手は五四歩と受けて指すのがよろし  
 いのであります即ち左の通り指して居べきであります

〇五六歩 〇後三四歩 〇五八飛 〇後五四歩 〇七六歩 〇後六二銀 〇四八玉 〇後











○七六歩後三四歩○六六歩後八四歩○七七角後八五歩○七八銀後  
 六二銀○六七銀後九四歩○七五歩後九五歩○七八飛後四二玉○四  
 八玉○三二玉○三八玉○一四歩○一六歩後六四歩○五八金左○五  
 二金右

下手方が一四歩を突ひた時にはまだ六四歩が突ひてありませんから上手方一六歩と  
 受けて居ずに早く六八角と引ひて指せば上手は飛車を七六へ浮く事も出来、又は直  
 ちに七筋から攻勢を取り飛車を縦横に使ふことが出来たのであります或は五六歩と  
 突き角を四六へ出て敵を脅かす事も出来ます

又右に反して下手の六四歩と突きある時に六八角と引くの利害は左の一例に依つて  
 不可なることを悟るのがよろしいのであります

○七六歩後三四歩○六六歩後八四歩○七五歩後八五歩○七七角後  
 六二銀○七八飛後九四歩○六八銀後九五歩○四八玉後四二玉○三

八玉後三二玉○一六歩後一四歩○六七銀後六四歩○六八角後六五  
 歩○七六飛後六六歩○同銀後九六歩○同歩後八六歩○同歩後八八  
 歩

右の如くにては六八角の引きは効がありません即ち六四歩のあるに六八角と引ひて  
 は下手から直ち六五歩と仕懸けられて不利となります但し此前の手順に上手が五六歩  
 と突ひてあつたならば六八角を四六へ出て指す手もありますが上下手の五六歩が突  
 ひてなく下手の六四歩が突ひてあつた時には前の一六歩を受けず六八角と引くの  
 は大に相違して居ますから考ふべきのであります

左香落 九六歩の受けの利害

○七六歩後三四歩○六六歩後八四歩○五六歩後八五歩○七七角後  
 九四歩○九六歩後六二銀○五八飛後五四歩○六八銀後四二玉○五



七銀 三二玉 四六銀 五二金 五五歩 同歩 同銀

曾て上手が敵の九四歩に對し九六歩と受け中飛に廻られ前記の如く指された時に下手如何にせば好きかとの質問を受けた事があります此の如く上手が左香の無きに九六歩など、受けて居るのは法に叶はず斯くては上手は玉を構ふの暇なく直ちに下手より八六歩、同歩、九五歩、同歩、同香にて上手の端は破れます又下手の八六歩を上手同歩と取つた時に八八歩打を上手同飛ならば五五角で銀の素抜きがあり八八歩を同角ならば八六飛で下手がよろしく又下手の

面局の銀五五

九	八	七	六	五	四	三	二	一
星	将				王	将	星	
	歩		歩		歩		歩	
		歩	歩					
	歩			銀				
		歩	角		歩	歩	歩	歩
				飛				
	桂		金	玉	金	銀	桂	香

持駒 後手 歩 先手 歩

手上前手 手下向

八六歩を同歩でなく上手同角と取れば同飛、同歩、六七角打にて下手十分の利益であります故に上手九六歩と受けるのは大に不利であります

左香落 六筋の仕懸に五四歩の利害

七六歩 三四歩 六六歩 八四歩 七五歩 八五歩 七七角 六二銀 七八飛 四二玉 四八玉 三二玉 三八玉 九四歩 一六歩 一四歩 六八銀 九五歩 二八玉 五二金 三八銀 九二飛 九八飛 九四飛 六七銀 七四歩 同歩 同飛 七八飛 七五歩 五八金 九六歩 同歩 同香 九七歩 同歩 同香 同桂 九六歩 九八歩 九七歩 なる 同歩 同歩 六四歩 五六歩 五四歩 五九角 六五歩 四八角 一五歩 同歩 一七歩 同歩 同香 六六歩 同歩 一六歩 同歩 同香 二四桂 一九香 一六桂 同歩 同香 九四飛 七



五飛 九七飛なる 七二飛なる 八六歩 八一 九 八七歩なる 一四歩 一五歩 同香 一二歩

下手方六筋より仕懸んとするに五四歩の受けは損なり此歩を突かざれば下手が六五歩と指した時に上手が四八角と引けば五四桂と打つて面白くなるのであります

左香落 六二銀早操りの利害

七六歩 三四歩 六六歩 六二銀 五六歩 六四歩 五八飛 五四歩 六八銀 五二金 右 四八玉 四二玉 三八玉 三二玉 五七銀 六三銀 四六銀 四二銀 一六歩 四四歩 一五歩 四三銀 二八玉 八四歩 三八銀 八五歩 七七角 七四歩 七八飛 九四歩 九六歩 七三桂 五八金 左 六五歩 六八飛 六四銀

此の如く早く六二へ銀を上つて指す人がありますが香落には矢張り六六歩の次に下手八四歩とつき端の香の無き方より攻むるを法とす早く六二銀と上り他方面にて手数盡すは香を落されたる甲斐なし

左香落 七六銀に七四歩の不利

七六歩 三四歩 六六歩 八四歩 七五歩 八五歩 七七角 九四歩 七八飛 六二銀 四八玉 九五歩 三八玉 四二玉 六八銀 三二玉 六六銀 六四歩 七六銀 五二金 五八金 一四歩 一六歩 六三銀 五六歩 五四銀 四八銀 八四飛 五七銀 七四歩 三六歩 四二銀 五九角 七五歩 同銀 九四飛 七四銀 八四飛 七三銀 同桂 同飛なる 九四飛 四六桂 四五銀 七五銀



下手方八四飛と浮き次に七四歩と突き同步、同飛、七八飛、七五歩と指すは定跡なるも其七四歩は敵の銀が六七に居る時なり然るに敵銀が七六に上つて居るに七四歩と突くは法になきもので其ため桂と銀が替つても上手の飛に化れ此分れでは下手に勝算なし

左香落 五八金と六八銀の利害

七六歩後三四歩後六六歩後八四歩後七五歩後八五歩後七七角後九四歩後七八飛後六二銀後四八玉後四二玉後三八玉後三二玉後五八金左後九五歩後二八玉後五二金右後三八銀後一四歩後一六歩後九六歩後同步同香後九七歩後同香なる後同桂後九六歩後八八銀香落將棋には上手十中の八九は六八銀と上るべきを此如く五八金と上つて指す人もあります然る時は忽ち下手より其姿の悪しきに乗じて端より仕懸けられ已むを得

六八銀と上るべきであります  
す八八銀と上つて此銀が容易に捌きがたき事となり大に指し悪し宜しく法を守つて

左香落 九六歩の時機

七六歩後三四歩後六六歩後八四歩後七五歩後八五歩後七七角後九四歩後七八飛後六二銀後六八銀後九五歩後四八玉後四二玉後三八玉後三二玉後一六歩後一四歩後二八玉後五二金後三八金後六四歩後五八金後九六歩後同步同香後七四歩後八六歩後同步後七四歩後九七歩後八八歩後同飛後九七歩香なる後同桂後九六歩後九八歩後九二飛後八五桂後九四飛後九五歩後同飛後七八飛

此駒捌きには下手方の九六歩の仕懸けは我六四歩を突かず敵の五八金の締らざる中に九六歩と仕懸けるをよろしいといたします五八金と締られては端の仕懸の効を減



じます

左香落 九八飛の受け

先七六歩後三四歩先六六歩後八四歩先六八飛後八五歩先七七角後六二銀先四八玉後四二玉先三八玉後三二玉先二八玉後九四歩先三八銀先九五歩先一六歩後一四歩先七八銀先五二金先六七銀先九二飛先五八金先九六歩先同歩先同飛先九七歩後九四飛

此の如き指し方の時に下手の九二飛に對し上手五八金は強過ぎて却つて端より乗せられますから矢張り九二飛、九八飛と一度は受けて指すのが法であります

左香落 玉操りの遅速利害

先七六歩後三四歩先六六歩後八四歩先七五歩後八五歩先七七角後

六二銀先七八飛後四二玉先六八銀先三二玉先六七銀先六四歩先八角先五二金先七六飛

下手方玉を三二へ操ることを急ぎ過ぎたるため九筋の歩を突かざる中に上手に七六飛と浮かれて端が指し難くなり香落ちの効を減じましたから此玉を四二へ操る前に九筋の歩を突くことを忘れてはなりません

左香落 五九角引の遅速

先七六歩後三四歩先六六歩後八四歩先七七角先八五歩先七八銀先九四歩先六七銀先九五歩先七八飛先六二銀先七五歩先六四歩先四八玉先四二玉先三八玉先三二玉先五九角先九六歩先同歩先同香先九七歩先同香先同桂先九六歩先九八飛先八六歩先同角先同飛先同歩先八九角



上手方五九角を引くに先づ五八金、五二金と指させて後に五九角と引くべし(六八銀と指す手もあり)然る時は飛角を替つて後も八九角を打たる、事はありません

左香落 七四歩の早突き利害

七六歩後三四歩六六歩後七四歩

右の如く早く七四歩と突く人がありますが然る時は上手より七八飛、八四歩、七五歩と指されて下手不利であります

左香落 六四歩早突の利害

七六歩後三四歩六六歩後八四歩七五歩後八五歩七七角後六二銀七八飛六四歩六八銀四二玉四八玉後三二玉三二玉後九四歩

下手が早く六四歩と突くは法に叶はず此六四歩は上手の銀が六七銀と上つて後に突くが法なり且つ此六四歩を突く順となるには前に九五歩と突き上げある順にて次で九六歩と仕懸る手もあるべき筈なり尙ほ一例を左に出す

七六歩後三四歩六六歩後八四歩七五歩後八五歩七七角後九四歩七八飛六二銀四八玉四二玉三二玉後三二玉六八銀六四歩五八金九五歩二八玉五二金三八銀一四歩一六歩九二飛六五歩同步二二角なる同銀八三角打八二飛六五角なる

此の如く六七銀の上り居らざるに急ぎて六四歩を突き更らに九二飛と廻りたるため上手より六五と突かれ上手の駒は捌け下手は香落ちの傷を指す暇なきに至れり故に六四歩を急かす先づ五二金と指すべく又六四歩と突ひたからは九二飛とさす六三銀か五四歩とさして居りたい處であります



左香落 一五歩の仕懸け利害

兎七六歩 兎三四歩 兎六六歩 兎八四歩 兎七五歩 兎八五歩 兎七七角 兎  
 九四歩 兎七八飛 兎六二銀 兎六八銀 兎四二玉 兎四八玉 兎三二玉 兎三  
 八玉 兎五二金 兎右 兎一六歩 兎一四歩 兎二八玉 兎九五歩 兎三八銀 兎八  
 四飛 兎五八金 兎左 兎九六歩 兎同歩 兎同香 兎六七銀 兎八六歩 兎同歩 兎  
 九九香 兎同角 兎八六飛 兎八八飛 兎同飛 兎同角 兎八二飛 兎  
 七七角 兎八九飛 兎九二飛 兎一五歩 兎同歩 兎一七歩 兎同香 兎四  
 四角 兎九四飛 兎九三歩 兎九六飛 兎三三桂 兎二六歩 兎同角 兎六  
 五歩 兎八六歩 兎八八歩 兎七九歩 兎八六歩 兎一七角 兎同桂 兎  
 二四香 兎三九玉 兎七七歩 兎同歩 兎四四角 兎八六歩 兎一七角 兎  
 兎四八玉 兎二八香 兎二九香 兎一六桂 兎二九成香 兎同銀 兎二

八桂なる 兎一三歩なる 兎同香 兎一四歩 兎同香 兎一二飛 兎二二銀 兎  
 八一歩 兎五一銀 兎一四飛なる 兎一二三香 兎三四歩 兎二九桂 兎一四  
 歩 兎一六歩 兎三六歩 兎一四香 兎三五香 兎四四桂 兎四五歩 兎四二金  
 よる 兎八二歩 兎五二銀 兎二五桂 兎二四銀 兎三三香 兎同銀  
 上 兎同香 兎同金 兎三四歩 兎二五歩 兎三三歩 兎同玉 兎一一  
 角 兎二二桂 兎一二金 兎打 兎三五銀 兎一三銀 兎打 兎三二香 兎二一金 兎  
 四二玉 兎三二金 兎同金 兎三三歩 迄にて 上手の勝 (此棋譜は上手方  
 故川井七段也)

此勝負は強がち一手の善悪によるとは云ひ難きも凡そ敵方の手に香車のある時に一  
 五歩と端より仕懸けるは無理なり即ち上手に香がある時は下手は二五桂と飛ぶ手な  
 く然る時は却つて二六香と打たれ端より攻むるに難く之に反し我玉頭を香に狙はれ  
 却つて危険を覺ゆるか又は此棋譜の如く無効に了るべし平手にても同様、十中八九



までは敵手に香ある時は一五歩の突きくれば考ふべし

### 角落の定跡本義

平手將棋は其向ふ處が何れにても同様の兵力が備はつて居りますので方面が廣く種類も澤山ありますが駒落ちの將棋は下手は上手の駒を落した方面より攻むるものでもありますから其攻進の場所も大抵定つて居ります角落ちでは下手方は櫓と銀冠りに限られたやうになつて居ります而して下手の櫓の時は上手は玉將を左に圍つて居飛車より三筋又は四筋に移して戦び下手の銀冠の時は上手は玉を右に圍ひ金象眼又は銀象眼にして飛車を左の六筋か七筋などへ廻して攻戦いたします此定跡は他の定跡書を御覽になれば分りますので此書には定跡は一々申し述べませんで双方に於ける一手々々の遲速利害を説くことを本義といたします但し段々と説ひて行く中には之が櫓か之が銀冠かと云ふことなども自然に明瞭いたしますから順次に御研究を願ひます

先

ます

### 角落櫓の端歩は無用

平手の部にも櫓組に端歩を受けるの不利を説きましたが角落ちにも櫓では端歩を受くるのは無用であります、櫓の端歩とは左の如きものを云ふのであります

四四歩 四二四歩 四五六歩 四五四歩 四二六歩 四二二銀 四四六歩 四四四歩 四一六歩 四一四歩

右の如く一四歩が無用の手であります之は平手櫓の部を参考あれば了解し得られます

### 角 落 櫓に端歩の不利

四四八銀 四三四歩 四五六歩 四五四歩 四四六歩 四四四歩 四二六歩







然かる時は下手は上手に後に二五桂の飛びあるを以て櫓に組むに多少の工夫を要すべし然るに上手が早くも二五歩と突ひて仕舞ひますれば下手は安心して十分に櫓に組む手順となります、因て上手も二五歩と突ひたからは勢ひ早や仕懸けを試みざるべからざる次第となり角と云ふ大駒を落して上手から早仕懸けをせざるを得ざることとなりましては甚だ面白くありません因て此二五歩は姑く下手の形勢を見て指すべき手でありませぬ然るに上手が早くも二五歩と指せば次に下手は三三銀と上つて順次櫓に組みますので上手は指し悪いこととなりませぬ

右に反し下手も亦上手の二五歩の突ひて無き中に三三銀と上る時は後に三七桂、二五桂と飛ばれて下手の三三、一三から攻められて面白くありません因て下手も上手が二五歩と突ひたならば三三銀と上つてよろしきも二五歩の突ひてなき時は三三銀は要心して六二銀とでもあがつて様子を伺つて居るべきものであります左に一例を示します

兎四八銀 兎三四歩 兎五六歩 兎五四歩 兎四六歩 兎六七金 兎六六歩 兎同金 兎七七歩 兎同銀 兎同桂なる 兎同玉 兎八六歩 兎四四桂 兎八七歩なる 兎六七玉 兎六五香 兎三二桂なる 兎同玉 兎四二金 兎同角 兎同桂なる 兎同飛 兎五四角 兎四三桂 兎三四桂 兎五五桂 打 兎五七玉 兎五二飛 兎四二金 兎同飛 兎同桂なる 兎同玉 兎七二飛 兎五二香 兎四三角なる 兎同玉 兎四四金 兎四二玉 兎五四桂 兎三一玉 兎七四飛なる 兎三八角 兎四二桂なる 兎同玉 兎三三金 兎同玉 兎四四 兎二二玉 兎三四桂 兎一三玉 兎二二銀 兎一二玉 兎一銀 兎同玉 兎同歩 兎六五歩 兎同桂 兎同桂 兎同歩 兎七五角 兎七六歩 兎四二角 兎一四歩 兎同歩 兎一三歩 兎同香 兎三五歩 兎同歩 兎二五桂 兎二四銀 兎一三桂なる 兎同銀 兎四五歩 兎五三桂 兎四四歩 兎同金 兎四五歩 兎三四金 兎三九香 兎六五桂 兎六六銀 兎六四角 兎五五歩 兎七四銀 兎三五香 兎同金 兎同金 兎五五



歩○三、三歩○同桂○三四桂○一、二玉○二五歩○後五六歩○二九飛○後  
 五七歩なる○先同銀○後同桂なる○先同金○後六五桂○一、四香○後同銀○一、  
 三歩○後二、一玉○後四、四歩○二六歩○後三、二銀○一六歩○後五、二金○右○三、  
 八金○後四、三金○五七銀○後三、三銀○四七金○六二銀○六八玉○後八、四  
 歩○後七、八玉○後八、五歩○六八金○後四、二玉○三六金○後三、二玉○四、五歩  
 後同歩○同金○後四、四歩○四六金○後六、四歩○六六歩○後七、四歩○七、六  
 歩○後三、一角○六七金○後七、三桂○七七桂○六三銀○八八銀○後八、六歩  
 同歩○同飛○三六歩○後八、二飛○八七歩○後二、二玉○三、七桂○後三、二  
 金○一、五歩○後七、五歩○一、二歩○後二、一玉○四、一、迄○にて上手の勝  
 以上は某七段と三段の棋士との實戦でありまして必ずしも此例にのみは依らず其手  
 腕次第色々の手もありませうが兎も角も下手が敵の二五歩の突き出し無き中に早く  
 も三、三銀と上つた爲めに上手から二五桂の飛びを利用して端から攻められ終に敗戦

に了つた實例であるから参考のため全局を出して置くのであります

角 落 高 櫓

これは高櫓と云ふ駒組であります之に依つて勝敗が決すると云ふ次第ではありませ  
 んが下手に利益の駒組でありますから参考の爲めに出します即ち下手方、金、銀、桂  
 で固め二重の陣でありますから容易に玉頭へは懸つて來られません又玉横は手薄の  
 やうでも飛角が備へて居りますから憂ひはありません

先四八銀○二四歩○五、六歩○五、四歩○四、六歩○後四、四歩○三、八金○後  
 三、二銀○三、六歩○後四、三銀○二、六歩○三、二飛○六、八銀○六、二玉○五、  
 七銀○左○七、二玉○五、八玉○後五、二金○左○六、六歩○後八、二玉○六、八金○後  
 七、二銀○七、六歩○後九、四歩○九、六歩○後三、三、角○一、六歩○後一、四歩○四、  
 七玉○後五、一角○二、五歩○後六、四歩○二、七金○後七、四歩○三、七桂○後六、四



金<sup>○</sup>二九飛<sup>○</sup>八四步<sup>○</sup>七七金<sup>○</sup>八三銀<sup>○</sup>八六金<sup>○</sup>七二金  
 之<sup>これ</sup>までにて下手<sup>したて</sup>高<sup>たか</sup>櫓<sup>やぐら</sup>に圍<sup>かこ</sup>ひ上げました<sup>あ</sup>が此時<sup>このとき</sup>上手<sup>うへ</sup>は先<sup>せん</sup>手<sup>て</sup>だけに七五步<sup>しちご</sup>と仕懸<sup>しか</sup>けて參<sup>ま</sup>  
 りますが同歩<sup>どうぽ</sup>、同金<sup>どうきん</sup>、七四步<sup>しちよ</sup>、七六金<sup>しちろくきん</sup>、二二飛<sup>ににひ</sup>と廻<sup>まは</sup>つて下手<sup>したて</sup>安全<sup>あんぜん</sup>であります

角 落 三八金の運速

金<sup>○</sup>四八銀<sup>○</sup>三四步<sup>○</sup>金<sup>○</sup>五六步<sup>○</sup>金<sup>○</sup>五四步<sup>○</sup>金<sup>○</sup>四六步<sup>○</sup>金<sup>○</sup>二三銀<sup>○</sup>二六步<sup>○</sup>  
 三三銀<sup>○</sup>三八金

前<sup>まへ</sup>にも申<sup>まを</sup>しました通り<sup>とお</sup>り角<sup>かく</sup>落<sup>らく</sup>の如<sup>ごと</sup>き駒<sup>こま</sup>を落<sup>お</sup>したる將棋<sup>しやうぎ</sup>で早<sup>はや</sup>く仕懸<sup>しか</sup>けの策<sup>さく</sup>戦<sup>せん</sup>を示<sup>しめ</sup>ことは  
 不利<sup>ふり</sup>であつて成<sup>な</sup>るべく下手<sup>したて</sup>の策<sup>さく</sup>戦<sup>せん</sup>を伺<sup>うか</sup>つて後<sup>のち</sup>に應<sup>おう</sup>戦<sup>せん</sup>すべきものであります<sup>が</sup>此<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>  
 く上手<sup>うへ</sup>が早<sup>はや</sup>く三<sup>さん</sup>八<sup>はち</sup>金<sup>きん</sup>と上<sup>あ</sup>るのは早<sup>さう</sup>計<sup>けい</sup>に失<sup>し</sup>つて此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>などは先<sup>ま</sup>づ一<sup>いち</sup>六<sup>ろく</sup>步<sup>ぽ</sup>と突<sup>つ</sup>ひて  
 の模<sup>も</sup>樣<sup>やう</sup>を伺<sup>うか</sup>ふ處<sup>ところ</sup>であります<sup>而</sup>して此<sup>こ</sup>一<sup>いち</sup>六<sup>ろく</sup>步<sup>ぽ</sup>に對<sup>たい</sup>し下<sup>した</sup>た手<sup>て</sup>が一<sup>いち</sup>四<sup>し</sup>步<sup>ぽ</sup>と受<sup>う</sup>けたな  
 手<sup>て</sup>方<sup>かた</sup>は櫓<sup>やぐら</sup>組<sup>ぐみ</sup>みの下<sup>した</sup>た心<sup>こころ</sup>でなく右<sup>みぎ</sup>玉<sup>たま</sup>に圍<sup>かこ</sup>ふ含<sup>ふく</sup>みと見<sup>み</sup>て三<sup>さん</sup>六<sup>ろく</sup>步<sup>ぽ</sup>と指<sup>さ</sup>して居<sup>ゐ</sup>るべく若<sup>も</sup>し又

一六步<sup>いちろくぽ</sup>に對<sup>たい</sup>し一四步<sup>いちしよぽ</sup>と受<sup>う</sup>けずに他<sup>た</sup>の手<sup>て</sup>を指<sup>さ</sup>して來<sup>き</sup>たならば下<sup>した</sup>手<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>は櫓<sup>やぐら</sup>に組<sup>ぐ</sup>む含<sup>ふく</sup>みと  
 察<sup>さつ</sup>して(櫓<sup>やぐら</sup>には端<sup>はし</sup>步<sup>ぽ</sup>を受<sup>う</sup>けざるものなれば)其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>に三<sup>さん</sup>九<sup>く</sup>金<sup>きん</sup>と上<sup>あ</sup>つてよろしいのであり  
 ます

角 落 四六步に對する四四步

角<sup>かく</sup>落<sup>らく</sup>にて上<sup>う</sup>手<sup>へ</sup>から四<sup>し</sup>六<sup>ろく</sup>步<sup>ぽ</sup>と突<sup>つ</sup>いた時<sup>とき</sup>は下<sup>した</sup>手<sup>て</sup>は十<sup>じゆ</sup>中<sup>ちゆう</sup>八<sup>はち</sup>九<sup>く</sup>は四<sup>し</sup>四<sup>し</sup>步<sup>ぽ</sup>と受<sup>う</sup>けるものでありま  
 す<sup>が</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>と某<sup>ぼう</sup>氏<sup>し</sup>の將棋<sup>しやうぎ</sup>某<sup>ぼう</sup>氏<sup>し</sup>は此<sup>こ</sup>四<sup>し</sup>四<sup>し</sup>步<sup>ぽ</sup>を受<sup>う</sup>けませんでした<sup>に</sup>玉<sup>たま</sup>を圍<sup>かこ</sup>ふ暇<sup>いとま</sup>なく終<sup>しゆう</sup>始<sup>し</sup>居<sup>ゐ</sup>玉<sup>たま</sup>  
 で戰<sup>たか</sup>ふ有<sup>あり</sup>樣<sup>さま</sup>となりました、それでも上<sup>う</sup>手<sup>へ</sup>には角<sup>かく</sup>の無<sup>な</sup>い將棋<sup>しやうぎ</sup>であり<sup>ます</sup>から容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>に下<sup>した</sup>  
 手<sup>て</sup>を破<sup>やぶ</sup>ると云<sup>い</sup>ふ分<sup>ぶん</sup>にも參<sup>ま</sup>りませんでした<sup>が</sup>勝<sup>しょう</sup>敗<sup>はい</sup>は兎<sup>と</sup>も角<sup>かく</sup>、定<sup>ぢやう</sup>跡<sup>せき</sup>通<sup>とほ</sup>り四<sup>し</sup>六<sup>ろく</sup>步<sup>ぽ</sup>に對<sup>たい</sup>して  
 は四<sup>し</sup>四<sup>し</sup>步<sup>ぽ</sup>と受<sup>う</sup>けるのが至<sup>し</sup>當<sup>たう</sup>であり<sup>まして</sup>居<sup>ゐ</sup>玉<sup>たま</sup>で戰<sup>たか</sup>はざるを得<sup>え</sup>ざるこゝなつては甚<sup>はなは</sup>  
 だ危<sup>き</sup>險<sup>けん</sup>であります<sup>此</sup>將棋<sup>しやうぎ</sup>なども後<sup>のち</sup>に上<sup>う</sup>手<sup>へ</sup>は隨<sup>ずい</sup>分<sup>ぶん</sup>受<sup>う</sup>け太<sup>た</sup>刀<sup>ちゆう</sup>となつて苦<sup>く</sup>戰<sup>せん</sup>をしました<sup>が</sup>  
 下<sup>した</sup>手<sup>て</sup>が四<sup>し</sup>四<sup>し</sup>步<sup>ぽ</sup>と受<sup>う</sup>けずに勢<sup>いき</sup>ひ玉<sup>たま</sup>を圍<sup>かこ</sup>ふの不<sup>ふ</sup>便<sup>べん</sup>を來<sup>き</sup>し居<sup>ゐ</sup>玉<sup>たま</sup>で急<sup>きふ</sup>戰<sup>せん</sup>し來<sup>き</sup>ましたので始<sup>はじ</sup>め



は苦戦しても其居玉に乗じて幸ひに勝利を得ましたから四四歩の受けなくてはならぬ實例として掲げます此後(圖面以下)上手には三筋、五筋、四筋と仕懸ける手がありますが下手は却つて手詰りの形であります

兎四八銀 兎二四歩 兎五六歩 兎五四歩 兎二六歩 兎三二銀 兎四六歩 兎八四歩 兎五七銀 兎八五歩 兎六八玉 兎八六歩 兎同歩 兎同飛 兎七八玉 兎六二銀 兎五八金 兎五三銀 兎四七金 兎六四銀 兎六八金 兎五二金 兎右 兎二五歩 兎三三銀 兎四五歩 兎三二金 兎四六金 兎三一角 兎三

面局の歩四一

	九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇				王		馬	将	皇	
				馬		馬	馬		
			将	馬	馬	馬	馬		
	馬	馬	馬		歩	歩	歩		
				歩	歩	金	歩		
	歩	歩	歩	金	銀			飛	
	歩	銀	玉						
香	桂							桂	香

持駒  
先手  
後手  
歩

手上前手 手下向

六歩 兎七四歩 兎六六歩 兎七三桂 兎六七金 兎九四歩 兎八七歩 兎八四飛 兎三八飛 兎七五銀 兎八八銀 兎一四歩

右には下手が四六歩に對し四四歩と受けざるため居玉の形で戦はざるを得ざることを説きましたたが之に反し上手も亦早く四六歩と突つて四七金と上らざる時は位まけとなつて指し悪きことゝなります即ち

兎四八銀 兎三四歩 兎二六歩 兎五四歩 兎五六歩 兎三二銀 兎一六歩 兎四四歩 兎一五歩 兎四三銀 兎二八金 兎三五歩 兎二五歩 兎三二角 兎二七金 兎三四銀 兎二六金 兎三二飛

以上にては未だ勝敗を斷ずることは出来ませんが兎も角も上手は四六歩を突かざるために位負けであります

角 落 八六歩の遅速



左の如く指して先手が後手となつた人がありますから参考のため出します

四八銀 三四歩 五六歩 五四歩 二六歩 三二銀 四六歩 後  
四四歩 三八金 五二金 右 四七金 四三金 五七銀 八四歩 後  
六八玉 八五歩 七八玉 三三銀 三六金 二一角 四五歩

此まで下手方櫓に組まんとする普通の定跡でありますが此で下手方は敵の四五歩を

後 同歩 同金 四四歩 四六金

と引かせて後に八六歩と指せば何のことはありませんが上手の四五歩を其まゝにし  
て直に八六歩と突ひても上手が捨て置きぬで同じ道理と考へて上手の四五歩を其ま  
まにして直ちに八六歩と仕懸ければ左の如く後手となり四筋に傷みを生じて玉を圍  
ふ暇もなきに至ります最も大抵は此四五歩は同歩、同金、四四歩、四六金と指しま  
すが何かすると直ぐ八六歩と仕懸ける人もありますので参考のため出します即ち四  
五歩を捨て置き下手から

後 八六歩 同歩 同角 八七歩 六四角 四四歩 同銀 四八飛  
後 六二銀 四五歩 打 三三銀 六六銀 七四歩 四六金 五三銀  
四五歩

と云ふ如く下手は指し込まれることゝなります故に四五歩は定跡の通り同歩、同金  
四四歩、四六金と下らせて指すのが安然であります

### 角 落 三六歩の古法

古き角落の棋には上手が早く三六歩と突いたのが澤山あります即ち

二一六歩 三四歩 二五歩 三三角 四八銀 四四歩 四六歩 後  
三二銀 三六歩

と云ふ手順であり此の如く始めに上手が二六歩より二五歩に進むすら現今は悪しと  
して指ぬことは前章に詳しく説きましたが此三六歩も早く突く時は上手方指し悪き



形となりますので現今は之を指しません詳細は天野氏の將棋精選にありますから略  
しますが古くは伊藤宗看などの大家も此通りさしたものであります

### 角 落 四八銀と二六歩の前後

角落は上手方に角がありませんから第一に七六歩と突く事が出来ません因て第一の  
戦用たる飛車を働かすのが必要でありますが左りとて第一に二六歩と飛車道を明け  
る手もありません故に下手が櫓に組むか銀冠りに来るか未だ模様に分りませんので  
上手は第一に四八銀と上つて模様を伺ふのが當然であります即ち

四八銀 二四歩 五五歩 四六歩 四四歩 三二八金  
三二銀 三六歩 四三銀 二六歩

と云ふまでは双方の駒組みが互ひに模様を伺ひつゝ盛り上つたのであります此で  
下手が三二飛と廻れば下手は玉を右に操つて銀冠りにすると云ふことが分りまし

たから上手は六八銀と上り此銀を五七へ上り上手の玉を右に操つて金、銀何れかの  
象眼に圍ひ飛車を左へ廻すの含みで指します、又下手が三二へ飛を廻らずに八四歩  
と居飛車で飛車先きの歩を突ひて来ますれば下手が櫓に圍ふことが分りますので上  
手は玉を左に操る含みで六八玉と上ることゝなります、以上が双方の模様見であり  
ますが若し此模様拘はらず上手が直ちに飛車先きから攻め入らんとして第一の手  
で二六歩と突て見ます即ち左の如く下手に受けられますと上手が手詰にされます

二六歩 二四歩 二五歩 三三三角

此の如く上手の策戦を直ちに下手に看破されまして櫓に組まれますと上手の桂馬は  
二五へ飛ぶことが出来まので一三、三三の要處を攻むることが出来なくなり  
要する櫓崩しには上手の桂を二五へ飛ぶ含みで居なくては爲りません此事は後に説  
き出す機会もあります但角も駒を落した將棋では敵の陣立の分らぬ中に上手よ  
り直ちに攻勢に出ると云ふことは無法であると云ふの要義を説て置くのであります



角 落 棒銀の不利

田島流

前章に上手が始めに二六歩の不法なことを説きました。が畢竟上手の二六歩と突ひたのは此處から銀を棒に立つて敵の玉頭に攻進せんとするのでありまして之は角落計りでなく平手の櫓圍ひにも素人方が好んで棒銀に上つて仕懸ける手でありませぬから其不利の點を申し述べます即ち

二六歩 二三四歩 二五歩 三三角 三八銀 八四歩 二七銀 八五歩 七八金 八六歩 同歩 同飛 八七歩 八二飛 二六銀 二二銀 一六歩 二四歩 三六歩 三二金 三五歩 同歩 同銀 二四歩

右の如くにて三八、二七、二六、三五と上つて行つた銀は二六か四六へ退却することゝなつて其暇に下手は四二へ角を引き次に三三へ銀を上り十分に櫓に組みますか

ら上手は之を破ることが出来ません故に上手が始めに二六歩と突き三八銀と上つて即ち棒銀に指すのは法でありませぬで上手の第一に指すべき手は四八銀であつて姑くは模様を見て下手が三二飛と廻るか八四歩と突くかに依つて上手から下手の策戦を看破して應戦すべきものであります最とも黒人は此位の事は皆承知であります。素人方は角落ちに限らず平手にも能く此二六歩、三八銀の棒銀を指したがりませぬので参考のため此に説明いたしましたのであります

角 落 右玉に金桂の遅速

四八銀 二三四歩 五六歩 五四歩 四六歩 三二銀 二六歩 四四歩 三八金 四三銀 六八銀 三二飛 二五歩 三三角 三六歩 六二玉 五七銀 左 七二玉 一六歩 一四歩 二七金 五二金 左 五八玉 八二玉 二六金 五一角 四七五 七二銀 六



六歩 後六四歩 後六八金 後七四歩 後二七桂 後六三金 後七六歩 後八四歩 後八六歩 後九四歩 後九六歩 後八三銀 後二九飛 後七二金 後七七桂

此駒組みにては上手の二六金と七七桂は早きに過ぎて手詰になる模様あり右玉に操つて指す角落將棋は成るべく飛車を左に廻して働かせるを法とす然るに二六金と七七桂のため飛車を左に廻すこと出来ざる場合となり甚だ指し悪かるべし之がために後には二七金と引き三八玉と引き四八玉と寄るなどの不利に落つべし即ち七七桂の次に下手後六一二角 後二七金 後二二飛 後二

面局の桂七七

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	将			角			将	皇
	王	香				飛		
	銀		香		銀		歩	
	歩	歩	歩	歩	歩	歩		歩
							歩	
			桂		銀	玉	桂	
				金		銀		
							飛	香

持駒 先手 なし 後手

手上前手 手下向

六金 後七三桂 後三八玉 後三三桂 後四七銀 後二四歩 後同歩 後同飛 後二五歩 後二一飛 後四八玉

と云ふ手順を免れざるのであります

飛車落 双方の要手

後七六歩 後三四歩 後六六歩 後六四歩 後七八金 後六二銀 後六八銀 後六三銀 後六七銀 後五四銀 後五六歩 後六二飛 後七七桂 後七四歩 後四八玉 後四二玉 後三八玉 後三二玉 後九八香 後五二金 後七九角 後四五銀 後六八角 後七三桂 後五七銀 後六一飛

之は上手方が角を七九から六八へ上り又五九へ引ひて指さんとする時の駒組みであります (此外に上手が七七桂と上らずに七七角と上るのもありますが其時は下手の四五銀は不必要でありまして大抵五四に居て六筋から仕懸けます但し一旦四五銀と



出て後に再び五四へ引て指す事もありませぬ。而して此駒組で上手が九八香とさすのと下手が六一飛と指すなどは飛車落ちの必要な手でありまして其意味は上手は角を七九に引ひて方向を變へましたので後に下手から六筋を破られた場合に下手の角を化込まれても直に香を取られない要心であります、又下手の六一飛と引くのも後に上手の角に七三へ角や歩を化れても直に飛車へ當てられぬためであります之れ等の手は緩漫のやうでも研究の結果定跡として多く指される手であります勿論急に挑戦すべき機會のあつた時は別段であります但し双方が正しく駒組みをして行く時は何れも急に指し込むと云ふ如き隙きはありませぬから互ひに此九八香と六一飛の手を指す暇があるのであります又四五銀の出も上手が七九へ角を引ひた時は必要の手であります之は上手の角の働きを留める手でありありまして若し此銀を上らずに居りますと上手から三六歩と突かれ次第に三筋かれ指れて下手の左桂が上がり得ず又上手の角に四六へ出られまして下手の七三を伺がはれて飛車の捌きに困るのであります因

て此駒組で九八香と六一飛と四五銀は必要の手であります又前に申しました如く此四五銀が再び五六へ引く場合は上手が六八の角を五九へ引かず四六銀と上つた時は一時角道が留りましたから此銀を替つて角を捌かれては損でありますから温順に五四へ引ひて居るのであります此銀は替らぬのが法であります即ち六一飛に對し上手が五九角と引ひたならば四五銀の銀は其まゝとして置き六一飛に對し上つたならば五四銀と引くことを忘れてなりません若し此銀を替はる時は不結果に了るのは研究上既に明かとなつて居ると云ふことを心得て置くべきであります

### 飛車落 七四歩の意義

飛車落の定跡は普通に六筋より仕懸けるため六四歩と突きて此處より右の銀を五四へ上り又飛車を六二へ廻るのが下手の法であります又居飛車のまゝで指すこともありますので其心得を述べます



七四步 後七六步 後三四步 後六六步 後八四步 後七八金 後八五步 後七七角 後

此下手の七四步は一寸危険のやうで上手の角に七筋を窺かれる恐れがあるやうに見えませんが實は此七四步は居飛車で指すには必要の手でありまして此步を突かずに置きますと上手から七五步と突かれ下手が桂の働きの出来なくなります總て飛車落、飛香落の將棋で居飛車で指すには此七四步を突ひて置ひて桂を七三へ上る含みが無くてはならぬのであります

飛車落 上手六八銀

普通上手は

後七六步 後三四步 後六六步 後六四步

の次に後七八金と上るのであります但場合により六八銀と上ることがあります之は

下手を迷はす考へでありませうが下手が注意して指せば此上手の六八銀は不利益の手で忽ち下手に乗せられますから其指しぶりを左に出します即ち下手の六四步の次に上手

後六八銀 後六五步 後七七銀

此でも上手は本来の如く七八金と上つて居れば此六五步に對し上手は同步と取つても角に金の繋がりがありますが四八銀では角が孤立で六五の步を取ることが出来ません又普通に六七銀と上ることも出来ません據らなく七七銀と上り我から角道を留める事となりました

後六六步 後同銀 後六五步 打後七七銀 後六二飛 後六七步 後七四步 後七八金 後七二銀 後四八玉 後七三銀 後三八玉 後六四銀 後五六步

以上にて下手は位勝となりましたから此後は急がずに普通定跡に依り四二玉より順次に駒組みをしてよろしいのであります、而して下手が始めに六五步と突ひたのは



上手が六八銀と上つたからでありまして上手が普通に七八金の時は此六五歩は最も時機を要しますので十分見定めなくてはなりません此六五歩は飛車落の生命であります最も之は別に申述べます

### 飛車落 六一飛の要義

前章に上手の九八香と下手の六一飛の緩漫の如き手も後の要心のため指すべきことを説きましたが尙ほ一局飛車落の駒組を出しまして此六一飛の引き加減を説きます扱て始め七六歩より十四手下手七四歩までは前章と同様の手順でありますから之を略しまして下手七四歩の次に上手

後五八金後五二金右後四八玉後四二玉後三八玉後三二銀後四八銀  
後一四歩後一六歩後七三桂後四六歩後二四歩後二六歩後二三銀後  
四七金後三二玉後三七桂後四二金上後二六歩後九四歩後九六歩後

### 八四歩後四五歩後六一飛

と此邊で飛車を引くのが適宜であります此局面は前章と異りまして互ひに十分駒組を整へまして後に決戦せんとするのでありますから下手も急かずに此處で六一飛と引ひて居るのであります之は一寸無駄手の如く見えますが前章にも説きし通り之を引ひて居りませんと敵に飛車に當られた時に飛車を逃げて居て後手になるからであります尙ほ参考のため此後の手を説きますれば左の如くにて下手の勝であります即ち六一飛の次に上手

後七九角後六五歩後同桂後同銀後同歩後九九角なる後四六角後六  
五桂後七二銀後六二飛後七三角なる後六六歩後五八銀後七七桂な  
る後六三歩後七二飛後同後七八成桂後六二歩なる後六八成桂後  
五二と後同金後四九銀後七七後六一飛後五一金打後九一飛なる  
後七六後三九金後六七歩なる後七三後六一歩後六四香後五八



と六六一香なる後四九と五一成香後三九と五同銀後四九る五同玉後二七銀後三一金後三三玉後七七角後六六香後同角後四四桂後九五香後五八銀後四八玉後四七銀なる五同玉後三六銀なる五三八玉後四七金打後二九玉後二七成銀にて下手勝

飛車落 三二銀の遅速

六二銀後六八銀後五四歩後六七銀後三二銀後七五歩

此指し方は著者と某三段とが實戦の時に下手が三二銀の上り方が早やかりしため上手より七五歩と位を取られ下手が指し悪くなりし一例であります、此場合は下手方が上手の六七銀の時に未だ三二銀と上る必要はありませんから六七銀に對し七四歩と指して居て次に三二銀と上つて居て遅からぬ處であります然るに一手順序を違ひ

したために上手から忽ち七五歩と位を取られたのであります故に此三二銀の處で先づ七四歩とつき次に三二銀と出て其次に三一角と引けば下手の位よろしき處であります最も此處は始めでありますから之れで勝負の定ると云ふのではありませんが法として位を取るべき一手の要訣を説いたのであります

飛車落 三一角の引き時

七六歩後三四歩後六六歩後八四歩後七八銀後八五歩後七七角後六二銀後六七銀後七四歩後五六歩後五四歩後七八金後九四歩後四八玉後三二銀後三八玉後三一角

之も某七段と某二段とが實戦上に顯はれた實例であります此局面は下手が普通に居角で指さずに三一八角を引ひて指す變體でありまして一寸考へたやうでありましたが下手は九四歩と云ふ不急の手を指して居たので一手遅れて上手の玉が三八へ寄つ



て仕舞つたので三一角も効が薄くなりました因て此如く指すには九四歩などを指さず上手の玉が四八に居る中ならば面白いのであります

飛車落 七八金と六八銀の差

○七六歩 ○三四歩 ○六六歩 ○六四歩 ○七八金

斯の如く上手方は金を角の腹へ上つて守るのが飛車落ち上手方の定跡であります然るに人に依りて下手を紛らすために此七八金を擧らずに六八銀と上る人があります  
が之れは無理の指し方でありまして此一手で上手は早くも負けと云つてもよろしいのでありますから下手は之に迷はされずに能く考へて指せば忽ち勝利となります即ち上手が六八銀と上つたならば下手は直ちに六五歩と仕懸けてよろしいのであります此六八銀の無理なることは前にも出しましたが再び實例を出して説きます而して飛車落ちに對し下手の六五歩の突き方は勝敗の分る、大事の歩でありますから容易

には突けません上手の角の腹に金が居らざる時は直ちに突きかけても上手は之を取らざる事が出ません取れば角を取られまから七七銀と上つて防ぐより外はありません、其處でも下手は六六歩と取り進む、同銀、六五歩と打つ此で五五銀と出れば五四歩と突かれますから七七銀と引より外はありません此後は下手は飛車を六筋に廻り此筋より攻めれば上手は忽ち破れとなります依つて上手の六八銀は無法でありまして是非とも七八金と上つて居るべきであります、併し七八金と上つたからとて下手が定跡を守つて指せば矢張り下手の勝となるべきは大駒落ちの將棋の已むを得ざる處でありますから参考のため一と通り上手の七八金以下の定跡を出します即ち  
○七八金 ○六二銀 ○六八銀 ○六三銀 ○六七銀 ○五四銀 ○五六歩 ○六二飛 ○七七桂 ○七四歩 ○四八玉 ○四二玉 ○三八玉 ○三二玉 ○四八銀 ○五二金右 ○五八金 ○一四歩 ○一六歩 ○九四歩 ○九六歩 ○八四歩 ○八六歩 ○七二飛 ○五七銀 ○四二金上 ○四六歩 ○七五歩 ○同



歩同飛七六歩後七二飛三六歩後六三金四七金七四金  
 八七金後八二飛三三七桂八五歩同歩七三桂四五歩後八六  
 歩同金八五桂行七五歩後七七桂なる同角六五桂打六  
 八角後七七歩八七歩後五七桂なる同角七五金同金八七  
 飛なるにて下手よろし

飛車落 六五歩の要義

飛車落ちに對し下手方第一の肝要の處は六五歩つきの一手にありと云つて可なる程  
 であります此六五歩の突き時の可否は忽ち勝敗に關します此事は前にも屢々申しま  
 したが此に又其駒組みから申しますと

七六歩後三四歩後六六歩後六四歩後七八金後六二銀六八銀後  
 六三銀後六七銀後五四銀後五六歩後六二飛後七七桂後七四歩後四

八玉後五二金右後二八玉後四二玉後四八銀後七三桂後五八金後三  
 二銀後一六歩後一四歩後五七銀後二四歩後四六銀後二三銀後五七  
 金後三二玉後九六歩後九四歩後九八香後四二金すぐ後七九角

此の如く上手が七九角と引ひた時に六五歩と仕懸ける手順がよろしいのであります  
 總體飛車落に對しては上手の角が八八に銀が四六に居る時は下手より六五歩と突く  
 は早く要するに此八八角と四六銀が揃つて居る中に六五歩と突く手なく上手が七九  
 角と引くか又は上手が三五歩、同歩、同銀と上つて此四六に居た銀が五七の金と離  
 れたる機を見て六五歩と指せば下手の利であります又上手の角が七九へ引かず他の  
 手を指して居たならば下手は一旦六一飛と引ひて潮合を伺ふべきであります若し  
 七九角と引きたるにも拘はらず下手が六五歩の機を逸しますと上手の角が六八より  
 五九へ引きますから其後に六五歩と突ひても上手に四八角と上られて下手指し悪く  
 なります要するに上手の八八角と四六銀が揃つて居る中には下手六五歩と仕懸けず



に上手が八六歩ならば八四歩とでもつひて模様を伺つて居るべきであります

飛車香車落 六五歩の利害

○七六歩○三四歩○六六歩○九四歩○七八金○九五歩○五八金○九二飛○六七金右○九六歩○同歩○同飛○九七歩○九二飛○五六歩○後六二銀○四八銀○六四歩○五七銀○六三銀○七七角○九八歩○六八銀上○七四歩○四六銀○五四銀○五七銀上○六二飛

右の如く指し居れば下手は定跡通りでよろしいのでありますが人に依つて此六二飛を後にして直ちに六五歩と仕懸け角を替つて八筋の空巢へ打ち込まんと考へる爲すものがあります、それは宜しくありません因て其宜しからざる結果を左に出します、要するに下手方が未だ玉も圍はずに上手に對し力ざしを試み且つ攻戰の駒も手に無きに急戰せる事ゆる終に失敗に終るのであります即ち上手の五七銀上るに

對し下手が六二飛と指さず六五歩と仕懸けた結果を示します

●第一 後六五歩○四八玉○六六歩○同銀○六五歩○五五銀左と指しまして此次に下手が(甲)の指し方

後同銀○同歩○九九歩なる○八六角○四二金○七七桂にて上手よろし(乙)の指し方

後同銀○同歩○六六銀打○八六角にても上手よろし(丙)の指し方 後六二飛○八六角にても下手悪し(丁)の指し方

後五二金右○八六角(此末上手に七七桂飛の手あり上手よろし) 右の如く下手の六五歩は早く惡結果となりますから此六五歩は止めて本文の如く上手の五七銀に對し六二飛と指して居り其後は左の如くにて下手がよろしいのであります

○五八玉○五二金右○三六歩○三二金○二六歩○四一玉○二五歩



後四二銀 後一六歩 後一四歩 後三五歩 後同步 後同銀 後六五歩 後四六銀 後六六歩 後同銀 後六五歩 後五五銀 左 後同銀 後同步 後九九歩 なる 後同角 後九八銀 後七七角 後八九銀 ならず (又は六六銀にても下手よろし)

●變化(イ)同銀の處 後同角 後同角 後同銀 後四四歩 後五五歩 後四三銀 (此末下手には二八角打と九九歩なるの手あつて好し)

●又(イ) 後同金 後六五歩 後六七銀 後七七角 なる 後同桂 後四四歩 後五五歩 後四三銀引 (之にても下手には二八角打と九九歩なるの手ありてよろし)

二枚落 三五歩の急所

後四八銀 後三四歩 後五六歩 後六四歩 後五七銀 後六五歩 後六八玉 後

七四歩 後七八玉 後七五歩 後六八金 後八四歩 後三八金 後八五歩 後三六歩 後六二銀 後三七金 後六三銀 後八八銀 後八六歩 後同步 後同飛 後八七歩 後八四飛 後一六歩 後一四歩 後九六歩 後五二金 後九五歩 後三二金 後二六歩 後四一玉 後四六金 後四二銀 後三七桂 後七三桂 後二五歩 後七四飛 後五五歩 後六四銀 後五六銀 後三五歩 後同步 後七七歩 後同步

二枚落に於ては下手が手順さへ好く指して行けば敵には飛角と云ふ左右の手が無いのでありますから自然勝てる道理であります。下手の悲しさで手順を誤るために上手の力で紛らされるのであります。此三五歩の手なども既に上手に致命傷を與へた手でありませんが、それでも順序を誤ると防ぎ切られず即ち此三五歩、七六歩を上手が後同步と取つた時に急いで同飛と取つたならば七七歩と打たれて下手は飛を逃げてなくてはならず却つて後手となつて折角の三五歩も其功なし、因て三五歩、同步、



七六歩、同歩の時に同飛と行かずに下手三六歩と打つのであります。上手は同金と取れば七六飛にて銀を取られるから、四四五桂と上る、四四歩、七七銀、三七歩なる。八六歩、四八と、三三四歩、四五歩、同銀、六三桂、打、五六銀、四三銀にて次に敵の歩を取つて三筋へ打ちと金を作つて徐々に攻むれば即ち下手の勝であります。

二枚落 五五歩留

五五六歩、三三四歩、四八銀、六四歩、五七銀、六五歩、五五歩、六二飛、五五六歩、七二銀、六八銀、七四歩、五七銀、七二銀、四六銀、六四銀、五八金、右、五二金、右、五七金、三二金、五八玉、後、四二銀、三六歩、四一玉、三七桂、三三銀

上手方が四八銀と上つた含みは次に五七へ上り六六歩と突き下手の角道を留める順序でありまして若し上手が右玉に圍ふ含みの時には五八金より四六金と上りますか

ら其含みを察すべきであります。又下手の六四歩は是非とも指すべき手で此で他の手を指して居ては上手に五七銀の次に六六歩で角道を留められます。上手が五五歩と突ひて態と下手の角に取らせるやうにするは若し下手が角で取つたならば上手は六五銀と歩を取り返へし下手方をして順序ある駒組みをさせず力將棋で壓倒する巧みであります。から下手は此五五歩を取るのには紛れが多くして下手の力では骨が折れます。故に此五五歩を取らずに六二飛と廻り以下本文の指し手の通りにて上手の五五歩留めば効を失ふこととなり下手の利であります。因みに上手が五五歩と留めずに六八玉と左玉に組んだ時は前に出ました三五歩の定跡で矢張り下手の利であります。

二枚落 玉の圍ひを必要とす

二枚を落された將棋は下手は何處からでも攻め込めると思つて急激に挑戦したくありません。ものです。然る時は上手の力に防がれて下手は指し切ることとなりま



す特に敵を攻めんとするに我玉が危険なる場所に居ては進んで戦はんとする駒が後顧の心配があつて十分に働くことが出来ません故に敵を攻めんとする前に當り先づ身方の陣地を手落ちなきやうに圍ひ而して後に攻勢に出づべきであります動もすると初心の中は我玉を其まゝ置き放しにして攻勢に出る人がありますが然る時は一時は優勢に見えても敵に駒を持たれた後に忽ち頓死をさせられるやうなことがあります因て玉の圍ひ方を左に出します即ち急がずに左の如く陣を整へ然る後に七四飛と廻つて飛角協力して上手の玉頭へ攻めかゝるなどがよろしいのであります

○四八銀○三四歩○五六歩○六四歩○五七銀○六五歩○六八玉○七四歩○七八玉○七五歩○六八金○八四歩○三八金○八五歩○三六歩○八六歩○同歩○同飛○八七歩○八四飛○四六歩○六二銀○二六歩○六三銀○四七金○七三桂○三七桂○五二金○四五歩○三二金○二五歩○四二銀○一六歩○四一玉○四六金○七四飛○八八

銀○七六歩○同歩○同飛○七七金○七四飛○七六歩○六四銀○八六歩○七五歩○八七銀○七六歩○同銀○八八歩

一枚落 六五歩の必要

○四八金○四三歩○五六歩○六四歩○五七金○六五歩

二枚落ちの將棋は上手方大抵は初めに四八銀と上り此銀を五七へ上るのであります。が本局の指し方は一寸變た定跡でありまして上手が金を始めに上つて參りますので始めて之に出逢ひますと下手は迷つて指し悪いことになりますから特別に出します。但し之れに迷はされず下手は矢張り三四歩と角道を明け次に六筋の歩を突き上げて構はずに六五歩と突き出して而して後に飛車を六二に廻つて此筋より攻勢を取つてよろしいのであります。二枚落ち將棋に於て下手方の是非指すべきは此六五歩であります。若し此歩を突き遅れて上手から六六歩と突かれますと其次に上手の金銀が次第



に此處より操り出して参りまして終には七六歩と突き七七桂と跳ねて来る順になり  
 ますと上手の駒捌きが十分となり下手の力としては如何とも致しがたきに至ります  
 故に此六五歩は忘れずに突くのであります要するに上手が四八金でも銀でも下手は  
 六五歩までは變りなく指して居てよろしいのであります其要義を説くだけで『此  
 一手』の意味は備はつたのであります尚ほ参考のために之れより以下双方の手を  
 記して下手の利のある處を示します即ち下手方六五歩の次に上手より

金五五歩 銀六二飛 金五六金 銀七二銀 金五八金 銀七四歩 金五七金上  
 銀七三銀 金六六歩 銀六四銀 金六五歩 銀同銀 金六六歩 銀五六銀 金同  
 金六四金 打金四六銀 金四二銀 金六八銀 金三三銀 金四五銀 金五二  
 金右 金六七銀 銀四四銀 金同銀 金同角 金四六銀 打金二二角 金六八玉  
 銀四四銀 金四八銀 銀七三桂 金五七銀上 銀五五銀 金同銀 銀同金 金同  
 金同角 金五六金 銀二二角 金四六銀上 銀八八銀 打金七八玉 銀九九

銀なる

下手方が此場合で八八銀と打つて桂香を手にして上手の歩切れを利用して五筋から  
 攻撃せんとするのは好き目の着け處であります之れにて上手が九九銀なるに對し  
 八八玉と寄り八九成銀、同玉と取つて居れば下手方は六五歩と打ちます之を同歩と  
 取れば七七角とられますから上手は五五銀と打つて防ぎましても下手に五四歩と  
 突かれても七五桂と打たれても上手の破れであります又下手の六五歩打に對し上手  
 五七銀と打ちましても下手七五桂、七八玉、六六歩、同銀右、同角、同金、同飛に  
 て矢張り上手の破れであります、又下手の七五桂に對し七八玉と上らず七八銀打と  
 防げば五四香打で矢張り下手の勝であります要するに上手は未だく固いと思ふ中  
 に八八銀打の如き一手のために破れとなるのであります將棋は斯云ふ處に緊急の  
 一手がありまして即ち『此一手』と稱すべき千金の手がありますから此局面に拘はら  
 ず何れの處へも應用の出来る要訣であります



六枚落 九九角なるのはめ手

○七。八。金。○三。四。歩。○七。六。歩。○九。九。角。なる。○八。八。銀。○八。九。ろ。○六。八。玉。○八。四。歩。○七。九。金。○九。八。ろ。○七。八。玉。○八。五。歩。○八。九。金。○同。ろ。○同。玉。○八。六。歩。○同。歩。○同。飛。○七。八。玉。

之は能く諸書に出て居る上手のはめ手ではありますが参考のため出して置くのであります。普通上手は最初に三八金と右の金を上るのであります。之は下手をはめるために熊と七八金と上り次に七六歩と明けて角を化せて捕虜にしたのであります。此七八金と七六歩が注意すべきであります。



將棋勝敗此の一手

定價金六拾

大正六年八月廿五日印刷  
大正六年九月一日發行

著者 關根

編輯者 將棋新報

代表者 濱井

濱井

東京府下桂原郡入新井

武居

東京市京橋區新榮町

高橋

印刷者



發行者 發行所

發行所

東京市日本橋區北鞘町十  
振替東京一三七五番

大阪

同發行所  
東京市神田區南神保町九  
振替東京二七七二三番

模範棋書  
發行所 斯





186  
211

同 六枚  
東京市板橋区  
三十三番  
大塚

大 八枚  
東京市板橋区  
三十五番  
大塚  
八九番六八

同 八枚  
東京市板橋区  
三十九番  
大塚  
九全同

同 八枚  
東京市板橋区  
四十一番  
大塚  
九全同

同 八枚  
東京市板橋区  
四十三番  
大塚  
九全同

同 八枚  
東京市板橋区  
四十五番  
大塚  
九全同

同 八枚  
東京市板橋区  
四十七番  
大塚  
九全同

同 八枚  
東京市板橋区  
四十九番  
大塚  
九全同



大五六半式民一日  
 大五六半式民廿五日

宝野金六

東京市板橋区



